

幼馴染の女の子が脱毛サロンを開業したので、おちんちん丸出しでVIO脱毛してもらった・・・

幼馴染の史華と再会したのは偶然だった。仕事帰り、いつもの駅のホームで電車を待っていると、見覚えのある後ろ姿が目に入った。長い髪をゆるく結んだ、清楚な印象の女性。高校の頃とほとんど変わらないシルエットに、思わず声をかけてしまった。

「……史華？」

振り返った彼女は、少し驚いた顔をしたあと、すぐに満面の笑みを浮かべた。「えっ、本当に！久しぶり！何年ぶり？元気だった？」

ホームのベンチに並んで座り、近況を話し合う。彼女は少し前に脱毛サロンを開業したらしい。「小さいサロンなんだけど、一人でやってて。意外と忙しくてさ」。俺が「すごいな」と返すと、史華は少し考えてから、声を潜めた。「ねえ……よかったら、特別にタダでやってあげようか？ 開店記念みたいな感じで。VIOとか、男の人も需要あるんだよ」

VIO。下半身のデリケートな部分。高校時代、清楚で成績優秀、いつも控えめに笑っていた史華の口からそんな言葉が出るのが、妙に現実離れして聞こえた。冗談だと思って笑ったが、彼女は真剣な目でこちらを見てい

た。「本当にやってあげるよ！これもなんかの縁だし。今度の休み、空いてる？」

断りきれず、数日後、彼女のサロンを訪れた。小さな個室にベッドがあり、白いシーツが張られている。史華は白衣のようなシンプルな制服姿で、「じゃあ、パンツ一枚になって、ベッドで仰向けになって。」と照れくさそうに指示する。